

## 株式会社スタイルブレッド

# 冷凍パンで躍進を続けるメーカーが システムに合わせて生産管理業務を標準化 全社的な情報も“見える化”を実現



### 導入の狙い

- ・生産管理業務の標準化と効率化の推進
- ・パッケージに合わせて業務改善を図る

### 導入システム

- ・生産管理システム  
『生産革新 Blendjin SMILE BS 2nd Edition』

### 導入効果

- ・システム上で在庫状況を把握できる
- ・管理業務の属人化を防止
- ・データの集計や分析を簡単に行える

### USER PROFILE

## 株式会社スタイルブレッド

【業種】製パン業

【事業内容】冷凍パンの製造・販売、  
ベーカリー店舗の運営

【従業員数】265名(2018年9月現在)



2018年9月取材



独自の製法を用いて開発された「冷凍パン」は、全国2,000店以上のホテルやレストランで提供されている

株式会社スタイルブレッドは、自家製の天然酵母で低温熟成させた「冷凍パン」を製造・販売するメーカーだ。ホテルやレストランなどのプロフェッショナル向けに加え、コンシューマー向けの商品開発にも力を入れている。業績が右肩上がりに成長する一方で、生産管理業務の課題が浮上した同社は、業務の標準化と効率化を図るためにシステムを刷新。パッケージシステムに業務を合わせることで、短期間に標準化を進め、業務改善を実現した。

## いつでも焼き立てを味わえる 冷凍パンで売り上げを順調に拡大

群馬県桐生市に本社を構える株式会社スタイルブレッドは、「冷凍パン」という画期的なオンリーワン商品の開発に成功し、毎年売り上げを順調に伸ばしている。

同社の冷凍パンは、自家製の天然酵母で20時間以上かけて低温熟成させる独自の製法が特長だ。オーブンや電子レンジでリベイク（焼き直し）するだけで、香り豊かな焼き立てのパンが手軽に味わえる。ホテルやレストランでは、その都度必要な数だけリベイクすることで焼き立てと変わらない本格的なパンを顧客に提供できるのだ。また、パン焼き釜などの設備や仕込み作業の時間、人材育成コストの削減にも貢献し、高い評価を得ている。

「1930年の創業当時から、世の中にパンを広めたい、パンを介して豊かな時間を感じてもらいたいという想いは一貫して変わりません。大手ホテルの料理長に当社の冷凍パンを高く評価していただいたことが、事業規模拡大のきっかけとなりました」と取締役 執行役員 経営企画室長の本間 美奈子氏は語る。

中間卸業者を介さずに直接販売を行う同社は、全国2,000店以上のホテルやレストランに商品を供給している。現在は東京、大阪、福岡に営業拠点を展開し、専門の法人営業担当者が、レストランやカフェなどのシーンに合わせた商品提案から導入後の販促プランまで、幅広い提案を行っている。

近年では、プロフェッショナル向けの業務用商品に加え、コンシューマー向けの商品販売にも取り組み、スーパーマーケットやデパートを通じて商品を提供する体制づくりを強化。2018年には、



「いつでも焼きたてパンのある暮らし」をコンセプトに、「Pan&(パンド)」という冷凍パンの新しいブランドを立ち上げ、自社サイトでネット販売も展開中だ

「いつでも焼きたてパンのある暮らし」をブランドコンセプトに「Pan&(パンド)」という冷凍パンの新しいブランドを立ち上げ、自社サイトでネット販売も展開中だ。

「単にパンというモノを製造して販売する会社ではなく、パンを通じて上質な時間や心の贅沢といった価値を提供する会社を目指しています」と本間氏は語る。

## 生産管理業務の 課題解決に着手

同社では、「冷凍パン」の売り上げや取引先の急激な増加に伴い、事務作業

の煩雑化が問題となっていた。今後の事業規模拡大に対応していくためにも、早急な業務の効率化は、重要な経営課題と認識されていた。

特に問題を抱えていたのが生産管理業務だ。本社工場を含めた製造3拠点の各担当者は、AccessやExcelで独自の原価管理用データを作成、運用していた。しかし、業務手順や管理方法が統一化されていなかったため、全社の生産状況が把握できず、一元的な情報管理はできていない状況だった。

「こういうデータを見たい、という要望が

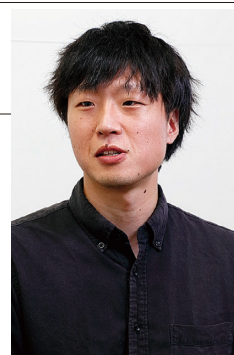
取締役 執行役員  
経営企画室長  
本間 美奈子氏

「『Blendjin』は、社員の増加に合わせて、柔軟にクライアント台数を追加しています。今後もパッケージ運用をベースにしながら生産管理業務の標準化と効率化を進めていきます」



ファクトリーグループ  
プロダクトコントロールチーム  
キャプテン  
鈴木 遼氏

「自由帳票機能はとても重宝しています。販売管理データの集計機能と同様に、生産管理のデータについても細かく集計できるようになると、さらに便利になると期待しています」





挙がると、都度、製造部門の担当者が手作業で集計データを作成する手法を取っていました。必要に応じて、複数のシステムをつなぎ合わせた複雑な仕組みを作ってしまったため、データの整合性を確保することが難しくなっていました」と本間氏は語る。

販売管理業務については、2009年にOSKの『SMILE BS 販売』を導入したことで、受注や納品といった業務の効率化は既に実現していた。ただし、生産管理データとの連携は行っていなかったため、担当者が改めて手入力を行うという重複作業が発生していた。そこで、データの信頼性や整合性を高め、会社全体として情報の“見える化”を推進するために、生産管理と販売管理の統合が検討された。

リコージャパンを含め、ITベンダー8社に生産管理システムの提案を依頼し、その中から最適なシステムとして選定されたのが、OSKの生産管理システム『生産革新Blendjin SMILE BS 2nd Edition（以下、Blendjin）』だった。

「なによりも現場の社員が使いこなせるかどうか、という使い勝手を重要視しました。その点、こちらは以前から利用している『SMILE BS 販売』と同じユーザーインターフェイスなので、だれもが違和感なく扱えると感じました。また、カスタマイズをすることでOSやアプリケーションのバージョンアップのたびに、開発費用が発生することを避けるためにも、パッケージのままで運用できることは大切でした。配合型の生産管理パッケージシステムである『Blendjin』は、冷凍パンの製造にマッチし、標準機能ですぐに運用を開始できる優位性がありました」と本間氏は語る。

## システムに合わせて業務を標準化 属人化の悪弊を払拭

今回の導入にあたっては、本間氏と、生産管理を担当するファクトリーグループ プロ

ダクトコントロールチーム キャプテンの鈴木遼氏を中心となってプロジェクトを始動。問題点を洗い出し、社内の業務ルールを明確にしながら、各部門の担当者に伝達していくかたちで進められた。

同社の取り組みには特徴的な点が二つある。一つは、システムに合わせることで、業務の標準化を図るという大方針を掲げたことだ。『Blendjin』は、さまざまな製造業で導入されている実績があります。その仕組みに合わせることで、時間をかけずに従来の属人的な業務のやり方を改善できると考えたのです。ですから、運用が軌道に乗るまではカスタマイズを行わないと決めました」

もう一つは、担当者が自分の業務効率化のためにと安易にAccessやExcelを使うことを禁止したことだ。「自分の管理用にサブシステムをどんどん増やすことは属人化に陥りやすく、“いつか来た道”になりかねません。これは、業務の標準化や情報の共有化を進めていくうえで、注意すべき重要なポイントだと思います」と本間氏は語る。

とはいえ、実際の運用段階では、パッケージの標準機能だけでは対応しきれない問題も出てくる。その場合に重要なのは、まず課題を皆で共有することだ。そして、業務ルールの見直しも含め運用で解決できないかを検討する。どうしても必要になったら、部分的なカスタマイズを施す。この判断が、結果的にスムーズな早期運用に結びついている。

システムの本稼働に向けて、稼働スケジュールありきで進む中、マスター登録の準備作業には少なからず苦労があったという。

「各商品の原材料や配合レシピの紐付け、包装材の種類や入り数などの情報を整理する作業が一番大変でした。商品点数も多かったのも、マスターの登録作業だけで約2カ月かかりましたが、これですべての商品情報を一元管理できる体制が整い

ました。苦労して綿密な準備を行った甲斐がありました」と鈴木氏は語る。

さらに、各製造拠点の担当者がスムーズにシステム運用できるように、操作手順書を事前に作成。各拠点で生産管理についての社内教育を実施した。

「単に操作手順を教えるだけではなく、自分たちが入力したデータが何に役立つのかをきちんと説明しました。会社全体の業務の流れを把握、理解してもらうことに重点を置いたのです。そうすることで、社員の責任意識も高まるからです」と本間氏は語る。

2018年1月に、本社工場のみでテスト稼働を行い、運用上の問題点を洗い出した。例えば、「生産工程で発生したロスの処理は、どの段階でどのように処理すればよいか」といったことを具体的に検証し、業務ルールに組み込んでいったのである。

## 情報を“見える化”して データ活用につなげる

2018年2月にすべての製造拠点で本稼働が開始された。半年の運用を経過した現在まで、問題なく安定稼働しているという。生産管理業務の標準化を短期に実現した結果、顕著な導入効果として現れたのがデータの信頼性向上と情報の“見える化”である。

「以前は、これだけの商品を作ったので、倉庫の在庫はこのくらいのはずだ、という、長年の経験に基づいた大雑把な感覚で整理していたのが実情でした。しかし今は、商品ごとの原材料や完成品の数、出荷数や各製造拠点の在庫数がシステム上でリアルタイムに把握できるようになっています。棚卸の結果がすぐに反映することも助かっています。今後は、納品日などの問い合わせに対しても迅速な対応が可能になると期待しています」と鈴木氏は語る。

全社員が共通システムで日々の業務を行えるようになった効果も大きい。「Access

やExcelでデータを加工するという仕事のやり方を続けていると、業務データがあちこちに散在し、必ず属人化が起きます。結果的にトラブルが発生しやすくなり、原因を調べるための無駄な時間と手間をかけることになります。今回の導入は、それを防ぐ絶好の機会となりました」

データ活用という面では、自由帳票の作成機能が大きいと役立っていると本間氏は言う。納品書や請求書のレイアウトを自由に設定して出力するだけではない。例えば、ユーザー属性別に分類集計し、売り上げを見るなど、欲しい情報の抽出、分析が自由にできることは大きな魅力だという。

「お客様ごとの売上推移を確認しようと自由集計表を利用してみたところ、作業完了までほんの10分程度でした。正直とても感動しました。的確な経営判断をするためのツールとして有効活用していきたいです。また、分からない時はサポートセンターに聞くと、理想のフォームで出力できるようになるので、助かっています」

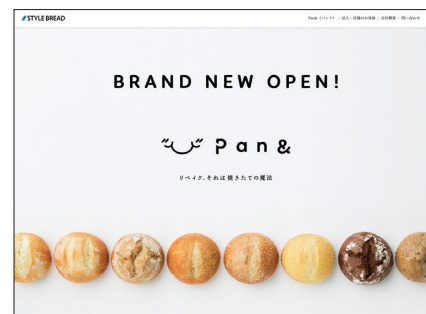
『Blendjin』による生産管理システムの運用は、まだ緒に就いたばかりだ。現時点では、需要予測に基づいた生産計画や労務費を時間単位で算出する原価管理、原材料の品質管理は別のシステムで運用している。将来的にはそれらを一元管理できるように、環境を一つひとつ整備していきたいという。



「Blendjin」の機能で各製造拠点の在庫数がリアルタイムに把握できるようになれば、より効率的な在庫管理を実現できると期待している

「最初からすべての管理を一つのシステムで進めようとする、現場のスタッフはついてこれなくなります。まずは使ってみて、段階的に一元化や統合化を進めていくことで、着実に業務効率を高めていく予定です。また、Excel出力してから加工している帳票についても、将来的には自由帳票で作成することができるようになると期待しています」と本間氏は語る。

同社は、管理業務の標準化と効率化を段階的に、しかし確実に推し進めている。今回導入した『Blendjin』は、その起点となる重要な業務基盤を担うことは間違いない。



株式会社スタイルブレッドのホームページ

<https://stylebread.com/>

お問い合わせ